

一本のまわりに集まろう

2013年12月号(創刊準備号)

published by ELPC

Online Magazine

月刊ほんほ

ほんインタビュー・松瀬学さん

『なぜ東京五輪招致は成功したのか?』
決定から17日目のスピード刊行!



『月刊ほん』特集

建築の名作、東京駅。

そこには数々のドラマも生まれた

■東京駅竣工100周年記念映画

「すべては君に逢えたから」

東京駅に近代史を読む

『東京駅の建築家 辰野金吾伝』他

東京駅は小説家を魅了する

松本清張「点と線」／種村直樹「東京ステーションホテル物語」他



映画「すべては君に逢えたから」

え!こんなにあるの!?知らなかった...

ほんの泉

気になる新聞・出版社のPR冊子を紹介

- 図書館司書からの本の話 —
- 1冊の本がさまざまな職種の人をつなぐ
- 投書** わたしの読書体験
- ◆ 3年間のお気に入りもこ もこせ!
 - ◆ 「ほん」にあった?かどうかはともかく息子は愛読する
 - ◆ 読書とわたし
 - ◆ 「サッカーだけじゃつまらないに発売されてサッカーライターになた
 - ◆ そよ風をくれる愛読書ときどき意味もなくすすんず歩く」
 - ◆ 都市に住みたい!何故日本人は郊外に住むのかを読み返す

column 図書館司書をつぶやき

図書館の「忘れられた仕事」

創刊準備号

12

December 2013

『月刊ほん』特集

建築の名作、東京駅。

そこには数々のドラマも生まれた

1914(大正3)年12月20日に完成・開業した東京駅は、2014年に100周年を迎える。

開業以来、日本の中央駅として機能し続ける東京駅は、日本と日本人を見つめてきた。

建築家の名を世に留め、文学作品の舞台となった。

今回は100周年記念映画「すべては君に逢えたから」も製作された。東京駅から好奇心が広がる。

■東京駅竣工100周年記念映画

「すべては君に逢えたから」

東京駅竣工100周年記念映画「すべては君に逢えたから」が2013年11月22日、封切になる。この映画はクリスマス間近の東京駅を舞台に巻き起こる6つの愛の物語。それぞれが抱える思いが、クリスマスに動きだす。

JR東日本の全面バックアップで製作されており、丸の内駅舎保存復原後、初のロケーション撮影が行われた。プロデューズは本作の制作プロダクションである白組の小池賢太郎とワーナー・ブラザース映画の松橋真三、脚本橋部敦子、監督本木克英。40代のクリエイターたちの温かい視線が結集されている。



Story 1『イヴの恋人』
ウェブデザイン会社社長・和樹(玉木宏)と、舞台女優を夢見て上京してきた玲子(高梨臨)はイヴの夜、偶然に導かれて再会する……



Story 2『遠距離恋愛』
デザイナーの卵の雪奈(木村文乃)と建設会社社員の拓実(東出昌大)。仕事に追われてこころがすれ違うふたりに、東北新幹線という強い味方が……

『すべては君に逢えたから』
2013年11月22日(金)新宿ピカデリー他全国ロードショー
出演:玉木宏、高梨臨/木村文乃、東出昌大/本田翼/
市川実和子/時任三郎、大塚寧々/倍賞千恵子、小林稔侍
配給:ワーナー・ブラザース映画
©2013「すべては君に逢えたから」製作委員会

Tokyo Station

『月刊ほん』特集

- 002 建築の名作、東京駅。
そこには数々のドラマも生まれた—
■東京駅竣工100周年記念映画「すべては君に逢えたから」
- 006 東京駅に近代史を読む
- 007 東京駅は小説家を魅了する
- ほんインタビュー・松瀬学さん
- 008 『なぜ東京五輪招致は成功したのか?』
決定から17日目のスピード刊行!
- 図書館司書からの本の話
- 013 1冊の本がさまざまな職種の人をつなぐ
(新潟市立中央図書館 祖父江陽子)
- 投書:わたしの読書体験
- 014 3年間のお気に入り『もこ もこもこ』
(近藤・N)
- 015 「ほんとうにあった!?!」かどうかはともかく
息子は愛読する
(黒澤千賀子)
- 015 読書とわたし
(U・あみ)
- 016 『サッカーだけじゃ、つまんない』に
触発されてサッカーライターになった
(鈴木智之)
- 016 そよ風をくれる愛読書
『ときどき意味もなくずんずん歩く』
(K・あづさ)
- 017 『都市に住みたい—何故日本人は
郊外に住むのか』を読み返す
(小野正明)
- コラム:図書館司書のつぶやき
- 018 図書館の「忘れられた仕事」
- 023 ほんの泉
新聞・出版社のPR冊子
- 026 創刊にあたり/編集後記



Story 5『二分の成人式』

余命3ヶ月を告げられた新幹線の運転士・正行(時任三郎)・10歳の息子・幸治(山崎竜太郎)の小学校で二分の成人式が行われ、妻・沙織(大塚寧々)と参観に行くのだが…。



Story 3『クリスマスの勇気』

好きな先輩に想いを告げられないでいる女子大生・菜摘(本田翼)。琴子に励まされて、あこがれの先輩に告白を決心する…。

プログラムには、6つのストーリーにそれぞれイヴの恋人、遠距離恋愛、クリスマスの勇気、クリスマスプレゼント、二分の成人式、遅れてきたプレゼントと名前が付けられているが、物語は短く淡い。2組のカップルのイヴの夜までが同時進行で進むが、それは始まりの物語だ。一方その傍らで長年ケーキ店を営む

琴子(倍賞千恵子)は49年前の恋に一つの結末を迎える。その横顔には東京駅がよく似合う。
登場人物の相関図を描いてみると少しずつつながっているものの、物語に因果



2013年11月22日(金)全国ロードショー
映画『すべては君に逢えたから』公式サイト
<http://www.warnerbros.co.jp/kiminieta/>



Story 6『遅れてきたプレゼント』

クリスマスイヴにケーキを売り切って店仕舞いにかかる琴子(倍賞千恵子)を訪れた謎の男(小林稔侍)が告げるのは…。



■東京駅竣工100周年記念映画

「すべては君に逢えたから」

Story 4『クリスマスプレゼント』

養護施設で母を待ち続ける少女・茜(甲斐恵美利)。職員の手春(市川実和子)は、子どもたちのために「今日一日をよい日にしよう」と願う…。



関係はまったく生じない。このあっさり仕立ては今様「新感覚派」か。いや実験性に富んだ新感覚派とは異なる、「人恋しさ」への率直な讃歌を主題と見るのが当たっているだろう。

Tokyo Station

東京駅に近代史を読む

東京駅が完成した1914年には、既に新橋—横浜間に初めて鉄道が開通してから42年、東海道線は神戸まで延び、上野—青森間全通からも23年が過ぎていた。

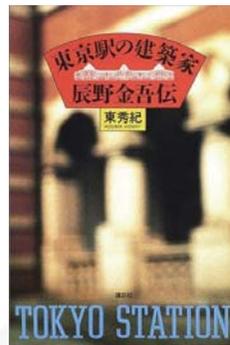
ようやく生まれた「中央停車場」はその後、日本が近代産業国家として、東京を基点に経済活動が発展するカナメとなっていく。開業の式典で時の内閣総理大臣、大隈重信が「凡そ物には中心を欠くべからず。猶ほ恰も太陽が中心にして光線を八方に放つが如し、鉄道もまた光線の如く四通八達せざるべからず：云々」と演説を残した、その通りになったのだ。

2012年10月に東京駅丸の内駅舎の保存復原が成り、新たな脚光を浴びる東京駅は、建築物としての歴史的価値も高い。その設計をした辰野金吾は近代日本の代表的建築家だ。

辰野の生れは1854年（安政元年）、

まだ江戸時代の唐津だ。官立工部大学校造家学科1期生として建築の道に入り、頭角を現す。47歳で帝国大学工科大学の学長を辞し、独立。フリーランスの建築家のさきがけである。赤レンガに白い帯が入るデザインは辰野式と呼ばれた。作品は東京駅のほかに日本銀行本店、大阪市中央公会堂、日本生命九州支店など数多くの作品が現存し、国の重要文化財に指定されているものも多い。

同年齢の高橋是清との交わりや相撲好きなど人間味あふれる辰野にまつわる逸



『東京駅の建築家 辰野金吾伝』東秀紀／講談社刊（絶版）

話は多く、辰野金吾に関する著作もたくさんある。

なかでも『東京駅の建築家 辰野金吾伝』（東秀紀／講談社）はおもしろい。著者の東秀紀が、建築の専門家としての知識と作家の手腕をいかに発揮して、明治という時代と人間たちを描いている。小説のプロローグは、金吾の息子が仏文学者の辰野隆を作家の内田百閒が訪ねてきて、東京駅が火災に遭ったことを告げるシーン。1945年5月25日の空襲の話だ。そして物語は維新に翻弄された唐津藩から始まる。



『東京駅はこうして誕生した』林章／ウェッジ



『東京鉄道遺産』小野田滋／講談社ブルーバックス

東京駅は小説家を魅了する

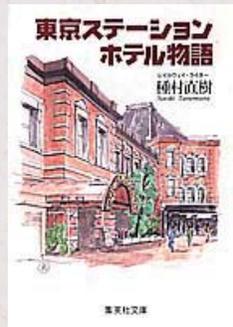
東京駅に話を戻そう。東秀紀も本のあとがきに「わが国近代建築のなかで、東京駅はおそらく最も多く小説に取り上げられてきたものであろう。とくに私の記憶に残っているのが、江戸川乱歩『怪人二十面相』である。」と述べている。

明智小五郎と怪人二十面相の初対面は東京駅のプラットフォームだ。外務省官吏に変装した怪人二十面相と名探偵はステーションホテルへ……。

しかし東京駅が重要な役割を果たす小説といえばやはり松本清張『点と線』ではないだろうか。東京駅の13番線から15



『点と線』松本清張／新潮文庫刊



『東京ステーションホテル物語』種村直樹／集英社文庫

番線ホームが見えたわずかな時間をめぐり推理の糸がほぐれる。2012年刊行の辻聡『東京駅の履歴書 赤煉瓦に刻まれた「世紀」（交通新聞社新書）でも取り上げている。『点と線』は雑誌「旅」に連載されたもので、連載が終わった直後の1958年2月に単行本化（光文社）された。その後、文芸春秋から単行本、新潮社から文庫本が刊行され、電子書籍化もされている。

種村直樹『東京ステーションホテル物語』（集英社）は、松本清張、川端康成など常連客の関わり、高級ホテルのた



『ドミノ』恩田陸／角川文庫



『駅物語』朱野焔子／講談社

ずまいと歴史を綴るノンフィクションで、文芸好きには魅力的なエピソードがいっぱいだ。現代の作家も東京駅を使う。東京駅はさながら人生の交差点のようだ。首都の中央駅であるだけではない。ホテルもセツトされているから、絶好の小説の舞台なのだろう。枚挙にいとまがない。新しくなった東京駅にはこの先も限りなく発見が生まれそうだ。



『東京駅で消えた』夏樹静子 新潮文庫刊（品切中）

Manabu Matsuse



ほんインタビュー 松瀬学さん

『なぜ東京五輪招致は成功したのか？』

決定から17日目のスピード刊行!

オリンピック・パラリンピック2020の東京開催が決定した2013年9月7日。扶桑社新書『なぜ東京五輪招致は成功したのか？』発売の告知は直後から始まった。そして、わずか17日後に書店の店頭に並んだ。東京決定を報じる書籍一番乗りを制した著者、松瀬学さんに、刊行までの苦心を聞いた。(取材日:2013年9月26日)

オリンピック招致に世界のパワーバランスが見える

9月7日のIOC委員の投票結果がわかるまで筆を置くことはできなかったはずなのに、書籍をこのスピードで刊行されるなんて、マジックみたいです。

決定の時は、現地ブエノスアイレスで取材をしていました。すぐに序章とあとがきを書いて、本文の中でも「東京に決まった」と記述したほうがわかりやすい箇所は修正して、脱稿。つまりそこまで

準備していたのです。新書版にしたのも製本が早いから。オリンピック招致への関心が高いうちに発行することは出版社の戦略です。

そうは言っても、東京が勝ったから、この本も初刷り12000部になったわけで、負けていたら、タイトルも「招致の裏側」とかになって…、やっぱりあまり売れないでしょう。

この本は、2013年7月、ローザンヌでのIOC臨時総会の取材から書き始めていますが、ぼくが東京オリンピック招致の取材を始めたのは、2016年の招致運動の時からです。その時は別の出版社でしたが、招致に失敗したので出版の話は立ち消えになりました。今回は扶桑社がどういう結果になっても出すと約束してくれたので、やり甲斐がありました。

この本の魅力のひとつは、松瀬さんがIOCや東京招致委員会などの取材現場で直接見たことと取材して聞いた話だけ

が書かれていることです。委員や関係者の人の姿を、国籍問わず公平な視点とらえていらつしやるので安心して読めました。

スポーツイベントの中でもいろんな要素が絡んでいるのがオリンピックです。各国の思惑が長いレンジで絡んでいます。国際スポーツ界の力関係とかメカニズムの部分に注目する。それが「招致」の実体だし、読者の関心事でもある。オリンピック招致を読み解くと世界のパワーバランスが見えてきます。

今回の東京招致を、ぼくは五分五分と見ていました。東京に来てほしいと願っていました。ライターとして肩を持つ記事を書く気はありません。でも、行間にオリンピックと東京開催への愛情がにじみ出ていたかもしれない。

IOCの人もJOCの人も、おいそれと取材には応じてくれない。顔見知りになるまで時間がかかる。最後の投票の仕組みもわかりにくいから、1回目の投票

の力を信じられるんです。

2020年には世界中からたくさんの方が東京にやってきます。そこで日本人もオリンピックを実感できるいいと思います。そのために、この本を一人でも多くの人に読んでもらいたいという思いは強いです。

—オリンピックを機会に日本人が国際性を高めることに期待したいですね。今は、日本人は内向きになっていると言われています。

1964年の東京オリンピックは、敗戦から立ち直った東京を、日本人を世界に見て欲しいという思いがあったでしょう。2020東京オリンピックに反対される方は「今更何もないでしよう」とおっしゃる。それは、ぼくは違うと思う。今には今の、日本が世界に発信するメッセージはあると思う。それをしっか

結果が出た直後に東京敗北なんて誤報が一部に出ましたよね。ぼくがオリンピック取材を始めたのは88年のソウルからですが、招致レースの取材はそれともまた違いました。

オリンピックムーブメントを伝えたい

—招致活動の経緯が一冊にまとまっていると面白く読めますし、文献価値も高いと思います。

そう言ってもらえるとうれしいですね。しかし、ぼくが書きたかったのは、招致レースの勝ち負けではなく、オリンピックムーブメントの入門書でした。

オリンピックという単語で大半の人がイメージするのは、各国の代表選手たちが勝負を戦わせるオリンピックゲームズです。けれどオリンピックの本質は「オリンピック」という哲学であり、オリンピックを推進する活動は「オリンピック

りつくりたい。それが、ぼくが東京オリンピックを応援する理由でもあります。

オリンピックをチャンスに

—松瀬さんは今年3月に『東京農場—坂本多田 いのちの都つくり』（論創社）を上梓されています。東京に農場をつくるという運動が、打ち続く困難にめげず前進する姿を描いた本ですが、東京を変えようという点で共通するものがあります。あの本があって、この本があるのは偶然ですか。

東京は日本の問題が集約されている場所ですからテーマになる率が高いのかな。ぼくはあの本でもこの本でも人間を描くことを目指した。2冊に共通するのは、人間はがんばってやればこれだけことができるんだよ、ということ。ぼくは人間しか書いていない。

都知事の猪瀬直樹さんを追っかけていくと、ぼろりと面白そうな話をしてく

ムーブメント」すなわちオリンピック運動です。それは日夜たゆむことなく続いているもので、実際続けている人たちは日本人の中にもいらつしやる。

—では、この著作こそが、松瀬さんのオリンピックムーブメントですね。申し訳ないことに、オリンピックという言葉を初めて聞きました。

実は、オリンピックについて述べよと言われても難しく、ぼくも人に説明できないうちにこんな本を書くのはおこがましいのですが、ひと言で言えば、世界平和に貢献する役割をスポーツに与える考え方で、オリンピックムーブメントは、競技者やスポーツ愛好家にとどまらず、すべての人に参加を求めているのです。ぼくも25年間、オリンピック取材をして来ました。その間に、オリンピックには、政治的、経済的な対立とは異なる友好的な国際関係があることをたくさん見て来た。だから、オリンピックムーブメント

れる。本来物書きだから、きっと、取材者にサービスしてあげたくなっちゃうんです。それにしても猪瀬さんは勝負強い。石原慎太郎都知事とは対照的です。

2016年の招致活動における最終ブ





レゼンが終わった後、結果が出る前に記者会見があった。ぼくが、ヨットレースにたとえて「ゴールした瞬間の心境は？」と質問したら、石原さんは「ゴールはしたけどトップかなあ」と言った。あの時石原さんは勝てると思ってなかったんですね。一方、猪瀬さんは勝つと言い続けていた。石原さんはロマンチストで、東京にもう一度オリンピックが来るのは夢があつていいな、と思つていたんじゃないかと思う。猪瀬さんはリアリストで、石原さんからの引き継ぎ事項だったにもかかわらず全力をあげて勝ちに行つて、勝つと信じていた。スポーツでは、よくそういうタイプが勝つんです。根拠もなく「おれは日本代表になる」とか広言して

るヤツが本当に日本代表になるみたいな。

—2020年に向けて、何をしたらオリンピックを成功に導けるでしょうか。

2020東京オリンピックで日本が世界に発信するメッセージの一番は、「復興しました、元氣になりました、有難うございました」。

そのためには「原発ゼロ」です。安倍首相のプレゼンでの言葉は重い。被災地とどう向き合うのか、ぼくも追いかけてはなりません。

完全バリアフリーにして世界のモデル都市になるのも、震災を体験した国だからできる都市づくりだと思いますね。

もうひとつの大きな課題は、スポーツの力を発信すること。日本はスポーツの力が低い。オリンピックまでに変わらなければ。今、スポーツ人口は減っています。おもしろい、健康によい、人間関係もよい、そんなスポーツをする機会をもっと

広げなければ。スポーツ庁ができて、国のスポーツ関係予算を一本化することが望まれます。オリンピックが来るということで、一致協力体制ができるなら、それこそ価値があるのです。

さらに、オリンピックは、かつての日本人のモラルに立ち返るチャンスだと思ふんです。今だって日・中・韓三か国のパラリンピアンはとても仲がいい。大勢の外国人とフェイスツーフェイスのコミュニケーションしないわけにはいかないオリンピックは、日本人のよさを発揮する場です。

いずれにしても日本人はオリンピックが大好きですから、間違ひなく盛り上がりと思ひますが、その前に、オリンピック招致を契機に、日本が変わることが願ひです。

松瀬 学(まつせ まなぶ)

1960年長崎県生まれ。早稲田大学卒。共同通信社運動部記者。1996〜2000年ニューヨークに駐在。2002年1月退社。ノンフィクションライターとして独立。著書『あなたが変わるまで、わたしはあきらめない』(井村雅代)『光文社』ほか。

図書館司書からの本の話

1冊の本が さまざまな 職種の人をつなぐ

今、図書館では、「本の貸出」という従来のサービスだけでなく、図書館が持っている資料や情報をくらしや仕事に役立ててほしいと、「医療・健康情報サービス」や「農業支援サービス」といった新たなサービスが拡がっています。「ビジネス支援サービス」もそのひとつ。ビジネスに役立つ資料のコーナーを作ったり、ビジネスに関するレファレンス(調査相談)を積極的に رفتたり、その図書館の利用者層や状況に応じたサービスに取り組んでいる図書館が増えてきました。

私が働いている図書館でも、平成19年にオープンした時からビジネス支援サービスに取り組んできました。コーナーの設置やレファレンス以外に、外部の関連機関なども連携してサービスをしてい



『新潟のおせんべい屋さんが東京の女子中学生にヒット商品づくりを頼んだらとんでもないことが起こった!?!』ROCKGIRLS 編著/かんき出版

たのですが、そのときにお世話になった中小企業診断士の方たちと意気投合し、「新潟ビジネス読書会」なるものを有志で立ち上げました。毎月1回、ビジネス本を1冊課題本として取り上げて活動しています。

今回ご紹介する本は、9月に行った読書会の課題本です。『新潟のおせんべい屋さんが東京の女子中学生にヒット商品づくりを頼んだらとんでもないことが起こった!?!』というタイトルのとおり、新潟県長岡市に本社があるおせんべいを製造する会社と東京の女子中学生がコラボして新しいおせんべいを作り上げるまでを描いた1冊で、商品開発プロジェクトに携わったいろいろな立場の人の視点から構成されています。

「仕事でこんな風に外部の人の声を聞くことは大事だと思つ」「自分もこの本に出てくる社員のように、できない理由」を先に考えてしまつ」などなど、課題本から感じたことを参加者同志、この本に出てくるおせんべいをつまみながら(笑)意見交換をしました。

ビジネス読書会のいいところは、いろいろな立場・職業の人(特に私たちの会の参加者は20代から30代の人が中心)と意見交換ができ、自らの視野が広がることです。そして、日常の仕事だけでは恐らく接点がなかったであろう業種の人とつながりが持てる—その接点となるものが、1冊の本なのです。電子であれば、あれ、「本」そのものが持っている役割は、これからも変わらないのではないのかなあと個人的には考えます。

ちなみに「新潟ビジネス読書会」でネット検索すると、私たちの会のブログがヒットしますので、どうぞ一度ご覧になってみてください。

(新潟市立中央図書館 祖父江 陽子)

投書 わたしの読書体験



読書体験募集!!

お気に入りの本、感銘を受けた本、人生を変えた本、忘れられない本など、みなさまの読書体験を募集しております。詳しくは事務局へお問い合わせください。

『もこもこもこ』

息子が初めて気に入った絵本は『もこもこ』でした。キャッキヤと笑ったり、親が読んだあとについて復唱してみたり。「静かにしているな」と覗くと、ベッドの上にはちよこんと座り小さい背中をこちらに向けてよく広げていました。1歳近くから4歳になるくらいまでお気に入りでした。

親が読んでも「？」なのに子どもは喜んで笑う、知人が言うので求めました。実際その通りだったので、改めて「谷川俊太郎ってすごいなあ」と思いました。

その後、通っていた幼稚園で毎月定期購読していた薄い絵本の数々（毎月2冊なので3年間で70冊以上!）のなかにもたくさんのお気に入りを見つけたらうれしいです。これは、親が選ぶことができなかった類の絵本もたくさん出会えることができます、よかったですと思っています。

年長さんになると宮沢賢治の絵本にも

興味を示しました。私は本屋さんが好きでよく行きます。賢治の絵本は、文はもちろん絵もすばらしかったので始めは私が買いました。『やまなし』『オツベルと象』『なめとこ山の熊』『水仙月の四日』などなど、読み聞かせるには少々長めで『親の頑張り!!』が必要でした。

小学1年生になった今も、息子はたまたに絵本を読み返しています。絵本には、かならずしも何か答えが載っているものばかりではなく、それを息子と一緒に探すなかで彼のこころの成長を促せるようなものも多くあり、奥深いなあと思います。

（東京都 近藤・N）



『もこもこもこ』
谷川俊太郎、元永定正／文研出版

↓マークは関連外部リンクがあります。クリックしてお進みください。

「ほんとうにあった!」かどうかはともかく息子は愛読する

息子は、小学生になってからも字を読むのは面倒だという。親としては、読書をするので、語彙が増えたり、感受性が豊かになったり、他人の気持ちを理解できたり、表現力をつく…などと期待をするのだが、親の思った通りには子どもは育たないものである。

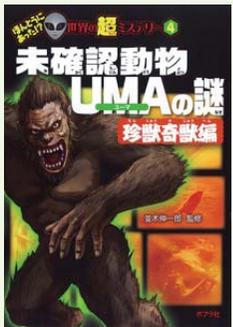
そんな息子だが、小学校4年生で好きな本に出会った。『ほんとうにあった!?!』世界の超ミステリー（4）未確認動物UMAの謎 珍獣奇獣編』という本である。ネス湖のネッシーやヒマラヤのイエティなど、確認できていない動物（UMA—ユーマと総称される）を、写真や最新の研究報告や起こった事件などで紹介している。謎に包まれた動物や現象に興味かわいたようだ。読み終わったあと、インターネットで調べたり、関連の本を読んだり熱心だ。字を読むのは面倒だが、

興味があるものを読むのは楽しいのだと思う。5年生になった今もこのシリーズは好きで、夫の転勤地ミュンヘンに移動しても、愛読している。

学校の課題図書や名作といわれる本も読んでほしいと願うのは、私も含めた世の親に共通だろうが、このような本をきっかけに自分の興味を広げていく読書もいいのかもしれない、最近思う。

（ミュンヘン 黒澤千賀子）

『ほんとうにあった!?!
世界の超ミステリー（4）
未確認動物UMAの謎
珍獣奇獣編』
並木伸一郎 監修／ポプラ社



読書とわたし

わたしは、子どものころから、あまり読書が好きではありませんでした。小さいころは親に本を読んでもらうのが好き

でしたが、字が読めるようになって、自分で本を読もうとは思いませんでした。そんなわたしでしたが、テレビドラマがとても好きになり、ドラマを見るだけでなく、その原作本やノベライズ本を読むようになりました。そしていつの間にか、ドラマ関係に限らず、さまざまなジャンルの本に接するようになっていました。

今年の初め、中3で私立の高校を受験しました。入学が決まった高校から、入学前の課題として本を何冊か読んで、自分なりの感想を書いて提出するように、という指示が出ました。

それを聞いたときは、まだ自分は読書が好きではないかと思っていましたので不安を覚えました。ところが実際にやってみると、本を読むことはまったく苦にならず、要約や感想もすらすらと書くことができました。

この体験から、わたしは、読書を通じて、理解力や文章力など、他の能力も鍛えられていたことを知りました。

（U・あみ）

↓マークは関連外部リンクがあります。クリックしてお進みください。

『サッカーだけじゃ、つまんない』に触発されてサッカーライターになった

僕が会社をやめて、サッカーを中心に活動するフリーのライターになるきっかけとなった本がある。それは杉山茂樹氏が書いた『サッカーだけじゃ、つまんない』という本だ。これは、杉山氏がサッカーを取材しながら世界を周り、現地でお会った人やもの、食事について綴ったエッセイ集だ。この本を読んだとき、「なんて楽しそうな仕事をしているんだ。彼のように世界を回ってサッカーを見た」という衝動を抑えられず、2002年の日韓W杯を機に、フリーのライターになった。

その後、いくつかの幸運もあり、04年の欧州選手権、06年のドイツW杯などの国際大会を取材することができた。04年、ポルトガルの地で欧州選手権を取材中の杉山氏とアルゼンチン料理を食べる

しまい、覚えたころにはもう帰国なんてこともあるのだが。

この本は、旅行へ行く前に読んで楽しい。ウキウキ感をほどよく高めてくれる。しかし、帰ってきてから読んだら、すぐにまた行きたくなってしまっただろうという気がする。

あまり実用的ではないが、心にそよ風をくれる、その加減がちょうどいい、いい加減な本である（最大限にホメている）。この著者の本は、本書以外もぜひ一読を、と人に勧めている。

(東京都 K・あづさ)



「ときどき意味もなくずんずん歩く」
宮田珠己／幻冬舎文庫

機会に恵まれた。美味しいワインと赤身の肉にかぶりつきながら、杉山氏は次に出すエッセイで、この場面をどう描くのかを想像した。自分が本の登場人物になったようで、うれしくも恥ずかしい気持ちになったのは良い思い出。

(鈴木智之)



『サッカーだけじゃ、つまんない。』
—EURO CITY33—
杉山茂樹／ビクターブックス刊(絶版)

『ときどき意味もなくずんずん歩く』

脱力感が心地よいエッセイだ。

旅雑誌に連載されていたものだが、文庫になって重宝している。

旅好きの人なら「あ、そんな感じある

『都市に住みたい—』

何故日本人は郊外に住むのか』を読み返す

なぜ今、相応な理由はあるものの、「都市」に、「超高層マンション」に、私は住み続けているのだろうか。

かつて住宅会社で郊外住宅開発を生業にし、その地に住み込んで生活していたのに、である。その当時に顧問としてご教示いただいた建築家、宮脇檀^{みやわき だん}さんの考えを確かめたくなり、この本を読み返してみた。

自動車と歩行者の共存をテーマとした住宅地の設計で知られる宮脇さんは、戦後住宅史を研究され、国民個々人の努力(犠牲)によってなされた戦後の復興のなかで、郊外住宅からの遠距離通勤を強めたことを批判している。「都市に住むこと」そして「公的賃貸住宅の充実」を提案し日本人の農民的発想が元にある一戸建て願望を払拭し、快適な、効率の良い

ある」というエピソードが詰まっているし、日常の「あるある」も散りばめられている。

「理由はないが、ときどき発作的にずんずん歩く。」と、作者は歩く。だが、歩き始めて後悔することも多いようだ。さらりと書いているけど死ぬ思いまでしている。なぜそこまでと思うが、これが発作なのだから仕方あるまい。説明できないのだ。

読んでいる私は、そこまで実行に移したりはしないけれど、くすりと笑いながらちよつと自分と重なる部分に思い当たる。

「現段階で、一番使えると思っっているのは、『ありがとう』だ。ただひと言』ありがとう』だけ現地で覚える。細かいことはいい。感謝の気持ちだけはともかく伝える。」という一節がある。「これは旅行で役に立つ!」と実感した。外国語を覚えられない私のような者にとつて有難い教えだ。もっとも私の場合「ありがとう」を覚えるだけでも時間がかかって

い都市生活を求めて「ゼア、皆で都市に住んで、都市を豊かな生活の場にしよう」と言う。さて、今ではめっきり郊外大規模住宅地開発が姿を消し、都市に超高層マンション建設が大盛況だ。宮脇さんのご提案に近づいているようにもみえるが、「快適な、豊かな生活の場」が実現しているのか。実際に住んでいる私は、疑問、課題が多いと思わざるを得ない。

何より自然環境の充実への希求は強い。都市に住み、年齢を重ねることに植物、樹、花……自然への愛着は深まるばかりである。それでも都市に希望はあるのか、願いは叶わぬものの宮脇さんに直接ご意見をお聞きしたくなった。

(神奈川県 小野正明)

『都市に住みたい—何故日本人は郊外に住むのか』 宮脇 檀／PHP研究所

どこでそういうイメージを仕入れるのかよくわからないが、図書館の仕事をよほどヒマだと思っている人があいかわらずにいる。そういう人は、本など適当に置いておいて、客が来たら貸出せばよいと思っているのだらう。しかし、その単純そうに見える貸出しだって、見かけほど単純ではない。今の図書館が扱っている資料は、いわゆる本だけではない。雑誌、視聴覚資料、紙芝居、おもちゃまで貸している図書館もある。

おもちゃといつてもゲームのようなものでピースがいっぱいあるものは、貸出・返却時の確認が大変である。もっとも、これは、だから、おもちゃまで図書館で貸出すのはやめると言っているのではない。おもちゃと言っても、図書館で資料とするのだから、それにふさわしいものと考えて受け入れればよい。私はおもちゃと言つより、安い地球儀とか星座早見とか分子模型とかそういう学習に役立つものを貸せばよいのではないかと思う。

借りた他の本に入れ違えたりする人がいるので、確認に手間取る。読みにくい表示だったり、似たような書名の本だったりすると、なかなか混乱する。馴れないと、とても時間がかかってしまう。

1年間に100万冊以上貸出す図書館もある時代だ。迅速に手続きしないと、すぐ、行列になる。そういうこともあって、最近では、セルフ・サービスの機械を入れているところもあるが、案の定、一定の年齢以上の人は使ってくれる人が少ない。それに付録付きだの面倒な資料はセルフ・サービスの機械で「はねる」場合も多い。そんなに、何でもセルフ・サービスにするのだったら、私は、セルフ・サービスの書店の方が余程簡単な気もする。タグを付けなければならぬから、決して、安い投資でできるものではないが、図書館のように「返してもらう」という大変な手間がない。

「貸す」ということは、「返してもらおう」ということが前提になっている。これが、



図書館の仕事を大変にしている。でも、仕方がない。貸さなければいいだろうな」と言いだす人もいるかもしれないが、それでは、図書館の蔵書が活用されない。それに、本になくなってしまっただけは困る貴重な本は、館内閲覧だけにして貸出さない。「返してもらおう」ことに伴う仕事は、どうも忘れられている。役所の人にこの仕事を説明するのは難儀である。

図書館の「忘れられた仕事」



もつとも、図書館でなくても、科学館や博物館がこういうものを貸出してもいいとは思うのだが、お気軽に貸して、お気軽に借りられるところは何と言っても図書館だらう。

紙芝居なんか返してもらった時には、抜けがないか番町皿屋敷のように数えなければならぬ。もちろん、紙の端にマーキングをするなどの工夫は考えられるが、これもまた手間のかかる話だ。CDなどは解説書と一緒に貸出したりするので、解説書とお皿と合っているか確認しなければならぬ。それでも、レコードを貸していた時よりは楽になった。レコードの場合、傷がないか調べたりしていた。もつとも、レコードを貸していた時代の利用者はとても上品で、レコードは大切に扱ってくれる人がほとんどだったので、今のCDの方が余程痛めつけられている。

普通の本だって、全然、簡単ではない。今、CD-ROM等の付録付きの本がかなりあるが、これもうっかりすると一緒に

まず、督促という業務がある。何回言っても返さない人がいる。銀行でいうところの「こげつき」みたいな人もいる。本をなくしてしまった人には弁償してもらおうのだが、それだって「すったもんだ」がある。本が見つからない以前に、その借りた人がどこへ行ってしまったのかわからない場合も少なくない。

返してもらおうにしても、開館しているのに返却ポストに入れ、コンピュータ・システム上では貸出中のまま残っているため、トラブルが生じることもある。一番不思議なのは、同じ日の開館中に返却ポストに本を入れ、他の本を持ってきて貸してくれと言つた人だ。貸出冊数制限に引っ掛かったりして、もう貸せないと職員が言つと、さっき返したばかりだと怒りだす。これが、同じ図書館でなくて、分館だったりすると、余計、複雑だ。いちいち電話して確認したりしなければならぬ(だから、私は貸出冊数制限はとくになしというやり方も悪くないと思う)。

不思議だろうと何だろうと、これが人間の習性に近いのだとあきらめて、私が今、携わっている新しい図書館では、返却ポストに入れたら一時的な処理をするような仕組みを考えている。お金がかかりますので、どこにでもお勧めできるものではありませんが。一時的と書いたのは、さらに、付録など忘れていないか、書き込みなどしていないか、自分のもの(カードなど)をはさんだりしていないか確認しなければならぬからだ。「返却処理」と言ってしまうは簡単だが、返すことに関わる仕事は、貸すことより大変だ。行きはよいよい、帰りはこわいということだろう。何でもそういう性質がある。天神様の言うことはよく聴こう。

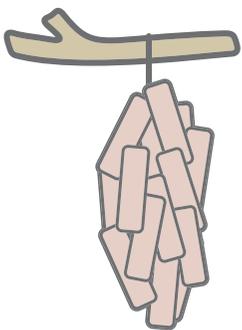
本が返ってきて、コンピュータ上の処理が済んだら、その先は多岐にわたる。予約があるものはそちらへ回さなければならぬ。また、修理しなければならぬものは、いちいち指示しなければならぬ。そうそう、相互貸借で他の図書館

から借りたものは梱包自体が大変だ。そういう、いろいろややこしいことのない本が、すっきり本棚に戻す本となる。しかし、ここでも問題は発生する。貸出しの多い図書館だと、この本棚に戻すべき本のあふれかえる。大学の図書館や学校の図書館の一部では、そういうものは利用者自身に返してもらっているかもしれない。私の出た学校も大学もそうだった。しかし、いろんな人が来る公共図書館の利用者に、正しい位置に返せというのは無理な相談である。そんなことをしたら、こちらが直す手間の方が大変になってしまふ。まだ、棚に戻し切れてない本について問合せがあったりすると、あちこち探しまわったりする羽目になる。だからと言って、返却処理は済んでいるが、まだ、本棚に並べていない本はそういう情報を付加するなんていうご丁寧なことを仮にやったら、余計、仕事が増えるだけであるから、考えない方がいいだろう。

小さい本の問題もある。新書や文庫だ。たいていの図書館は、文庫は(場合によっては新書も)他の本と別にしてあるが、一緒に置いてある図書館もある。一緒に置いている方が確かに探しやすい。しかし、小さな本は、まわりの大きな本のなかにもぐってしまふことがある。また、文庫や新書は「かたまり」として見たいという向きもある。

それから、別置本というものもある。これは何らかの理由があつて(○○コーナーとかを作ったりしている場合等)、普通の並びとは別に置いてある場合だ。この場合は、特にルールが存在しないので、アルファベットやラベルや、あるいは、そのままずばりその名称をラベルに書いていたりするが、どこに置いてあるのかわかるのに苦労する。あまり

から借りたものは梱包自体が大変だ。そういう、いろいろややこしいことのない本が、すっきり本棚に戻す本となる。しかし、ここでも問題は発生する。貸出しの多い図書館だと、この本棚に戻すべき本のあふれかえる。大学の図書館や学校の図書館の一部では、そういうものは利用者自身に返してもらっているかもしれない。私の出た学校も大学もそうだった。しかし、いろんな人が来る公共図書館の利用者に、正しい位置に返せというのは無理な相談である。そんなことをしたら、こちらが直す手間の方が大変になってしまふ。まだ、棚に戻し切れてない本について問合せがあったりすると、あちこち探しまわったりする羽目になる。だからと言って、返却処理は済んでいるが、まだ、本棚に並べていない本はそういう情報を付加するなんていうご丁寧なことを仮にやったら、余計、仕事が増えるだけであるから、考えない方がいいだろう。



図書館の「忘れられた仕事」

多すぎるのは良くないのだが、どうしても多くなつてしまふ。

それと、ある程度の大きさの図書館には書庫というものがあつて、大図書館になると、書庫も何種類もある。

とにかく、単に本を返すと言っても単純ではないのだ。

公共図書館の朝一番の仕事は、返却ポ

さて、本棚に本を返すだけだった一仕事だ。そんなのはアルバイトでもできるだろうということ、アルバイトにやってもらっている図書館もたくさんあるが、誰でもできるというものではない。図書館の本はNDCという分類番号で並べてあるのだから簡単だろうという意見もあるだろう。もつともなご意見だ。そもそも、簡単になるように、図書館の分類は番号にしてあるのだ。番号なら誰でも順番がわかるからだ。

ところが、実際には、そう簡単には問屋が卸さない。まず、本棚に入りきらない大きな本がある。大型本といって、これに記号をつけて区別する場合もあるが、美術や建築など大きな本が多い分野は、はじめから本棚自体、大きな本も入るように組み立ててある場合もあるのだ。大型本と言っても相対的なものである。だから、いろいろ変動するので、かえて区別すると煩わしいので、同じ本棚の下の方とか、背の低い書架で天板のないものだったら上の方にまとめてあ

ストから本を回収してくる仕事だ。これが大変だ。返却ポストの裏側には空調なにかないところが多い。夏など暑くてたまらない。返却ポストの裏側に這いつくばっているときは坑内労働でもしている気分だ。いったん、身体が熱くなつてしまつと、なかなか、さめない。だから、最近の環境に配慮した冷房では、ほぼ一日中暑く感じている。まあ、身体を動かさなければ、そんなに暑くはないのだが、身体を動かさないと図書館の仕事などない。

公共図書館の朝一番の仕事のうち、返却以外でも共通してあるのは、機械を立ち上げたり、申込書等が揃っているか確認したり、「コピーの紙を確認したり、新しい新聞を出し、昨日の新聞を所定のところに納めることと、「書架整理」と呼ばれる仕事だ。

「書架整理」ほど、認識されていない、いわば「忘れられた」仕事はないだろう。しかし、結構な業務量と意味のある大きな仕事である。

え! こんなにあるの!? 知らなかった…

ほんの泉

新聞・出版社のPR冊子

このコーナーでは、「出版社PR誌」(*)を紹介し、書店に置かれている場合もありますが、雑多な他の情報に埋もれて気がつかない場合が多いですし、地方書店が減少している昨今、なかなか読者に届いていないのが現状です。本好きな読者はもちろんのこと、本と読者を繋ぐ役目を担う図書館で働く方々には、その存在を知り、ぜひ手に取って頂きたい「ほん」達です。「月刊ほん」は、出版社発信のこれら「ほん」達を、知識の水ととらえ、このコーナーが「その源=湧き出す泉」になればいいと考えています。

※創刊準備号で紹介するPR誌がすべてではありません。



ダイヤモンド社 経(Kei) <http://www.diamond.co.jp/magazine/kei/>

経済・ビジネスに特化し、著名な経済学者が日本経済をめぐって刺激的な論文を執筆。科学者や作家、経済学者、歴史学者など、さまざまな分野の著名人のエッセイや旅行記まで掲載。連載も多いことから、定期購読がぜひお勧め。全国主要書店で10日頃より無料頒布。頒布部数限定、品切れ続出でほしい方はお早めに。全国主要図書館において閲覧可能になる予定。



文藝春秋 本の話 <http://hon.bunshun.jp/>

「本との出会いは人との出会い」をモットーに文藝春秋刊行の単行本、新書、文庫等の最新情報を「月刊文藝春秋」誌内を舞台に詰め込みました。毎号話題の新刊を数多く取り上げ、書評、インタビュー、対談などで多角的に著者や作品のテーマに肉迫します。このほか、ウェブでは多彩な筆者による連載も掲載しています。「本の話WEB」では、各書籍の発売に合わせてコンテンツをアップしています



角川書店 本の旅人 <http://www.kadokawa.co.jp/mag/tabibito/index.html>

角川書店が毎月発行する、本好き読書人のための文芸PR誌。特集対談、連載エッセイ、連載小説と内容がかなり濃く、コミックにノンフィクションもある。連載小説は、時代小説から恋愛小説まで、うれしくなるほどの豪華執筆陣。カラーページもたっぷり、読みごたえは充分すぎるほど。主要書店に置いてあるが品切れが早いので、必ず手に入れたい場合は本屋さんで予約購読を。近刊は電子書籍でダウンロードも可能。



朝日新聞社 一冊の本 <http://publications.asahi.com/ecs/22.shtml>

少しハードだがお勧めの一冊。執筆陣は超豪華。新刊紹介らしさがなく、巻頭随筆、特集にと読みごたえは充分にあり。夢枕獯や橋本治など有名作家の連載も多く、いずれは単行本として発売されそうな内容で、読書好きには満足の一冊。

図書館の「忘れられた仕事」



開架式の図書館では、利用者が自由に本を出し入れできるため、どうしても、排列が乱れてしまう。これを放置しておくと、図書館はいつのまにかぐちゃぐちゃになり、本を探せなくなってしまう。それで、毎日、書架整理と言って、分類番号順に本を並べ直すのだ。本が探せないというのは図書館にとって致命的だ。特に、今の図書館のように予約サービスの量が多いところでは、それだけで大量のクレームを生むことになる。書架整理は、単純に順番どおり並べているだけではない。ある棚だけぎゅぎゅぎゅに本が入っていたりするので、それを均して行く。これは、結構、知恵のい

る作業で、下手糞な人がやると頭の方はっかり詰まっているために、かえって本が入らなくなる。均して行くと言っても、たいていの図書館は書架に余裕がないので、あと1冊、2冊の隙間の攻防になっているので職人技だ。書架整理の時に、除籍すべき本を見繕うこともある。書庫に移すべき本も見繕う。これは、別に作業をすることも可能だが、何を除籍するかという判断は選定より重要な判断だ。よく本のことを知っている人が行わないと怖い。ところで、図書館の司書はどうやって本のことを知るのだろうか？ 本屋にもよく行くし、自身もたくさん本を読む。また、出版社の広告もよく見るし、新刊の情報はTRCや日販等から得ている。しかし、もともと本があるところは、実は図書館自身なので、書架整理によって知る本が非常に多いのだ。書架整理が単純作業だからと言って、まったく正規の司書が携わらなくてよいということには

ならないのはこの理由による。とくに新人のうちには、こういう作業的なことを通して、本そのものをより多く知るといことが必要である。だから、時には、書架整理している本を開いて、こんな本があったのだと頭に入れていかなければならない。仕事と学習を兼ねているのだ。この書架整理という仕事は、当然のことながら、開架の冊数が増えれば増えるほど大変になる。そして、今、述べたように、すべてアルバイト任せにしているというものでもない。司書が自分の図書館の書架の状況を知らなくなるといのは、狩人が森の動物の状況を知らなくなると同じことだ。でも、今、こういう仕事の崩壊が始まっている。図書館の仕事が、本の仕事なのかどうかかわからないような状態になってきている。いろんなイベントも大事なのかもしれないが、もともとも基本的なところがぐずぐずになってしまつのは憂慮すべきことだ。(終)

え! こんなにあるの!? 知らなかった…

ほんの泉

新聞・出版社のPR冊子

(※1) 出版社PR誌とは?

各出版社が毎月あるいは定期的に発行する書店向け、個人向けの雑誌。出版社に個別に依頼し年間購読するのが一般的だが、大手出版社のものは書店のレジカウンター横に置かれていて、定価あるいは無料で持ち帰ることができるものもある。さすが出版社が発行するだけに力が入っているものが多く、読み物としての内容も充実、各紙の連載からは単行本・文庫・新書も生まれています。ある出版社から聞いた話では、「新人発掘」の場になっているとの事。



みすず書房 みすず <http://www.msuz.co.jp/book/magazine/>

人文・社会科学、哲学・思想、文学・芸術などみすず書房の刊行書と関連する文章を掲載。海外の最新の成果の紹介もふくめ、PR誌を超えた総合文化誌として機能する。また、毎年初めには「読書アンケート特集」を掲載して、広く読書界からの注目を集めている。



春秋社 春秋 <http://www.shunjusha.co.jp/magazine/553/>

春秋社は、宗教書(特に仏教)を中心に哲学、思想や心理、音楽分野の専門出版社。創刊は昭和34年6月、「広い歴史的視野をもち、正しい批評精神につらぬかれた諸家の御論考と、かたわら春陽の暖かさ、秋気の爽涼を感じさせる好随筆を得て、『春秋』の名にふさわしい雑誌を發展させたいとねがっています」という意図の下に創刊。単なるPR誌でなく、文化誌として45年、現在通巻550号を越えている。



未来社 未来 <http://www.miraisha.co.jp/np/mirai.html>

比較的「硬め」だが、かなり読みごたえのある情報誌。特に、国内外の時事評に鋭く切り込んでおり、冒険を試みているのが好感が持てる。少し専門的で業界的な内容が多いが一読の価値あり。



有斐閣 書齋の窓 <http://www.yuhikaku.co.jp/shosai/subscribe>

有斐閣は、社会科学・人文科学系の学術出版社。「書齋の窓」は読者と著者のコミュニケーション、新刊情報を届けることを目的に、1953年6月に創刊。法学、経済や社会学、心理学などの社会科学、人文科学分野の小論文やエッセイ、連載やコラムなどを掲載する学際的な情報誌。



紀伊國屋書店 scripta <http://www.kinokuniya.co.jp/>

紀伊國屋書店出版部が発行する無料PR誌。季刊で3・6・9・12月中旬発行。誌名はラテン語で「書かれたもの」という意味があり、「言葉は去りゆくが、書かれたものは残る」という格言から採ったという。全国の紀伊國屋書店および主要書店の店頭で入手できる。個性的な執筆陣によるバラエティーに富んだ連載が充実しており、他の出版社のPR誌とはまたひと味ちがう読書体験が得られる。読書好き、本屋好きにはぜひ読んでほしい一冊。



岩波書店 図書 <http://www.iwanami.co.jp/tosho/top.html>

知的好奇心あふれる読者に半世紀以上愛読されてきた岩波書店の雑誌。本屋さんのレジカウンターに置いてあるのを読まれたことがある人も多いはず。感動のヒューマン・ストーリー、旅のときめき体験、人生への思索などを綴る滋味のエッセイなど、『図書』ならではの一流の執筆陣が書き下ろす。本との出会い、読書の愉しみの再発見の場として、ぜひ手にとってほしい一冊。年間購読料1000円で毎月ご自宅に届きます。



新潮社 波 <http://www.shinchosha.co.jp/nami/>

創刊は昭和42年1月、24頁、定価10円の季刊誌から。昭和47年3月から月刊誌となる。読書情報誌としての重要な役割のほか、連載から数々のベストセラーが誕生。新刊書の書評、著者インタビュー・対談のほか、エッセイ、連載小説などを掲載。宣伝っぱさはあまり感じられないので好感が持てる。表紙には新刊を刊行する作家の直筆の文字が掲載されており、毎号違うので、書店で探すときは注意。



筑摩書房 ちくま http://www.chikumashobo.co.jp/blog/pr_chikuma/

総合出版の筑摩書房のPR誌。特集や連載もの、小説、近現代史、詩論、古典文学案内、サイエンスありでかなりの読みごたえ。本屋さんで見かけたらぜひ手にとって読んでほしい一冊。サイトで一部立ち読みも可能。



小学館 本の窓 http://www.shogakukan.co.jp/magazines/back_number/_id_069000

本の世界が豊かに広がる文芸誌。本好きにとって読んでためになる一冊。連載対談から小説連載、エッセイ、コラム、読書案内、新刊情報まで、120ページの小さな雑誌で驚くほど充実した内容。サイトでは、最近のバックナンバーの内容が確認できる。



小学館 きらら <http://www.quilala.jp/>

連載小説満載の新しいかたちのブチ文芸誌。人気作家の連載作品が毎月読める。書店員さんの執筆する読書コラム、著者インタビューも掲載。新刊紹介というより、新進作家のアンテナショップのような役割。10人前後の作家が競作しているので、読み切れないほどのボリューム。あなたの好奇心を存分に刺激します。一般雑誌扱いで本屋さんに置いてある。上記のサイトは、「WEBきらら」になっており、一部の小説の立ち読みも可能。



集英社 青春と読書 <http://seidoku.shueisha.co.jp/seishun.html>

本の数だけ、人生がある。一集英社の読書情報誌。本好きにとっては、定期購読するに価値ある一冊。特に対談は錚々たるメンバーで、コラム「本を読む」も充実。連載読物はもちろん、今月のエッセイなど、ちょっとカバンに忍ばせて通勤途上で読むのに最適。バックナンバーの内容は上記サイトから。

ダイヤモンド社は2013年で100周年。同時に『週刊ダイヤモンド』も創刊100周年を迎えます。

ダイヤモンド社創立100周年記念 「週刊ダイヤモンド」デジタルアーカイブズ

<http://www.diamond.co.jp/go/digitalarchives/>



日本経済と伴走してきた 『週刊ダイヤモンド』 100年の軌跡を 図書館でたどる。

『週刊ダイヤモンド』創刊100周年を記念して、大正2(1913)年の創刊号から2000年まで、約4000冊を検索・閲覧できる図書館向け商品『20世紀のダイヤモンド誌「週刊ダイヤモンド」デジタルアーカイブズ』がスタートいたしました。20世紀日本の歩みを「経済」の視点からとらえた歴史的記事の数々を、鮮明なデジタル画像でお読みいただけます。

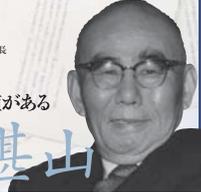


創刊号 1913(大正02)年5月10日号

《問い合わせ先》 株式会社 寿限無
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-30 神保町ハウスR04
TEL:03-3512-2761 http://www.keiyou.jp/contents/contents_dia.html

北岡伸一氏
東京大学教授
剛毅な精神と徹底したリアリズム

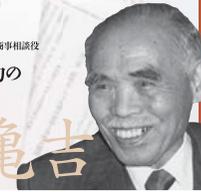
寺島実郎氏
多摩大学学長、旧日本総合研究所理事長
現代に生きる湛山、今こそ読み返す価値がある



石橋湛山

田中直毅氏
国際公共政策研究センター理事長
大正、昭和の「財界整理」に現代的意義を見る

丹羽宇一郎氏
在日中国総領事館全権大使、前伊藤忠商事相談役
克己心と忍耐・努力のエコノミスト



高橋亀吉

東洋経済新報社 〒103-8345 東京都中央区日本橋本石町1-2-1
電話 03-3246-5653 <http://www.toyokeizai.net/shop/>

電子書籍

石橋湛山全集

高橋亀吉 著作集



照大正 財界変動史 (上)(中)

日本近代経済形成史

第一、二、三巻



日本近代経済発達史

第一、二、三巻



石橋湛山全集 第一巻

投稿・投書を歓迎します

「月刊ほん」では、図書館・本に関する投稿・投書を受け付けております。字数は800～2000字。受け付けは電子メール(原稿としてテキスト変換できる書類の添付)のみです。概要、氏名、略歴、住所、電話番号、メールアドレスを添えてください。採用の場合は事務局より電子メールでご連絡します。受け付けのアドレスは以下のとおり。

電子書籍図書館推進協議会 事務局
elpc@fms.co.jp

<http://www.keiyou.jp/elpc/>

一本のまわりに集まろう

月刊ほん

Online Magazine

published by ELP
創刊準備号
2013年12月号

2013年12月発行
発行人 山崎博樹
編集人 黒田久美子
発行所 電子書籍図書館推進協議会 事務局
住所 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-30 神保町ハウスR04
TEL: 03-3221-0597

ELPCオンラインマガジン 「月刊ほん」の創刊にあたり

ELPCのオンラインマガジンを初めて皆さまにお届けすることができました。当会は、図書館員と出版者の情報共有や意見交換を目的として昨年設立されましたが、まだ組織としては十分な体制とはなっていない。特に会員は全国に点在していますので交流を図る機会はいくつかありますが、少しでも情報が共有できればと考え、このオンラインマガジンを発行することになりました。

図書館職員も本の仕事がメインとはいえ、あまり本そのものについて発言をしたり、文章を書くことはそう多くはないようです。

また、出版者と図書館の相互の状況も十分に伝わっていないと思えません。このオンラインマガジンがそれを打開していただくの一助になれば幸いです。今後、皆さまの積極的な投稿をぜひお願いしたいと思っております。

電子書籍図書館推進協議会代表 **山崎博樹**

編集後記

マガジン企画時、「誰でも興味を持つ内容を入れるべし」として、発刊時に話題になるであろう映画等の内容を「特集」や「インタビュー」とし、その製作裏話や出版の動機、関連本の紹介をしようと思った。理由は、「まずは多くの人の目に留めてもらう事」が重要だと考えたからです。創刊準備号「東京駅」に敗れたのが「人類資金」。もう少し発刊が早かったら、「ドラマ 半沢直樹」だったかもしれません。話題性のある内容は、図書館・出版社にとって読者に向き合う共通の材料ではないでしょうか？

ご意見お待ちしております。

電子書籍図書館推進協議会 事務局

027 December 2013

December 2013 026

本に関わる人たちが 新たな関係を築き、

繋がることを目指して。

出版社(者)はたった一人の読者であっても、その読者が欲するならば本を届けたいと思うはずであり、図書館員は、その本と読者を繋ぐ重要な媒介とならなければいけません。その為には、出版社(者)と図書館の新しい関係を築きながら、読者と本を繋ぐ新しい場が求められていると考え、「月刊ほん一本のまわりに集まろう」を発刊する事といたしました。

「月刊ほん」を通して、本を中心として働く図書館員と本を提供している出版社(者)との相互理解が深まり、その事で図書館が従来のかたちを超えて、読書推進のとびらを開くことにも繋がるのではないかと考えています。将来は「本を読む人」一人ひとりにも働きかけ、読者と本との出会いの場も提供していければと考えています。

電子書籍図書館推進協議会
ELPC (Ebook Library Promotion Council)

電子書籍図書館推進協議会(ELPC)は、図書館と出版社(者)の新たな関係を築くため、2012年9月に設立された会です。